

## 【Rさん事例】

### <担当ワーカーの記録から>

Rさん（56歳・男性）は、妻と娘（高校2年生）の3人暮らし。Rさんは在職中に脳梗塞を発症、リハビリ入院中に病院からの依頼を受け、ケアマネジャーとしてかかわりはじめた。

主治医からは「軽度の片麻痺のほかに高次脳機能障害もあり、コミュニケーションも難しいので、本人の負担にならないように、ご家族の方に介護保険で何ができるのかを伝えてください。本人はうつ傾向もあり、リハビリの意欲もなく、これ以上の回復は望めません。早急に自宅退院の準備を整えてください」と依頼される。面接室にやって来た妻に、介護保険でできることについて説明した。妻に希望を聞くと「夫が職を失ったことで経済的にも厳しいため、最低限の家の環境のことだけ整えてもらえたら十分です。幸い身の回りのことはゆっくりなら出来ます。私はこれからパートで働いていくつもりです」と答える。Rさんにも自己紹介をし、妻と相談した方向性について説明すると、Rさんは拒否することもなく、表情も変えずに静かにうなずかれていた。

住宅改修と福祉用具の活用によって住環境を整えた後、Rさんは自宅に戻った。要介護2という認定結果を受け、電動ベッドが貸与され、日中はほぼそこで過ごした。一人で過ごす時は、「転倒が怖いから」という家族の意向を受け、Rさんの生活空間は隣に置いたポータブルトイレとの間のみとなっている。月に一度、家族が在宅のときに訪問してモニタリングを続けた。

訪問時は、ほとんど妻との会話となり、妻のパートの苦労話や介護負担について傾聴した。Rさんは、ほとんど口を開かなかった。意欲も食欲もないようで、みるみるうちにやせていくRさんに、妻の介護負担の軽減のためにも介護保険サービスの利用を繰り返し提案するが、眉間にしわを寄せ、かたくなに首を振るばかりであった。